

ソーシャル・ラーニング・スペース /言語カフェ:L-café



留学生と日本人学生が交流しながら様々な言語や文化を学ぶ場(ソーシャル・ラーニング・スペース)として、2013年5月、津島地区にオープン。「L-café」は岡大生であればいつでも自由に訪問し、気軽に留学生と英語や日本語で会話をしたり、宿題をしたりと自由に過ごせる場を提供している。また、留学生による「英会話クラス」や、留学経験のある日本人学生による「TOEFL対策」、言語教育センターの教員による「学習・留学相談」などを行っている。その他、英語だけでなく、韓国語、中国語、ドイツ語、フランス語、日本語のクラスカフェも開講。加えて、気軽に参加できる場として、会話を楽しめるフリートークや、参加自由の様々なイベントやワークショップが開催されていて、一日に150人以上の学生が「L-café」を利用している。

学生の英語学習をサポートする「スチューデント・ティーチャー」

岡山大学津島地区にある留学生と日本人学生の学びの場「L-café」。セルビア共和国出身の留学生ベトラ・プリビチェビッチさん(文学部特別聴講学生)は、「英語を学びたい」「留学したい」という学生に英語を教える「スチューデント・ティーチャー」として活動している。スチューデント・ティーチャーを始めたのは2013年11月。日本にやって来た直後だった。将来、学校の先生になることを目標にしており、「活動を通して、良い経験になるのでは」と考えたそう。活動当初は、日本人学生にはシャイな印象があった。慣れないうちは、自分ばかり話してしまうことも多かったが、それでも回数を重ねる

教師の夢に向かって一歩前進

当時13歳だったベトラさんは、翌年には日本語が学べる学校に進学。その後も勉強を続け、「もっと日本語の勉強を進めたい」と留学を決めた。「岡山大学のキャンパスは、自然が豊かでうれしい」とベトラさん。岡山の気候の良さも、留学先の決め手となった。大学では、日本語や歴史・文化などについて学んでいる。

ごとに、学生たちと自然にコミュニケーションが取れるまでになった。セルビア共和国は、日本から西へ直線距離で9千226キロメートル。なぜ、故郷から遠く離れた日本に興味を持ったのか。きっかけになったのは、母国でテレビ放送されていたアニメ「ドラゴンボール」。初めて日本語を聞き、その「やわらかさ」に惹かれたという。「日本語はいい音がする。耳にやさしい言語だと思った」。



▲大阪城にて

スチューデント・ティーチャーを続ける中で、楽しみがある。教えている学生の成績が良くなった、英語で出来ることが増えたりすることだ。「学生が何かを達成してくれることが嬉しい」と、やりがいを感じている。「(先生)には、面白い本がいっぱいあります」。『360°』内にある本棚には、様々な種類の本、雑誌がぎっしりと並んでいる。これらの本を使って会話をしたり、ゲームをするなどして、楽しみながら交流を深めているという。

普段は先生役のベトラさんだが、学生から教えることも多い。や、新しく発見することも多いという。最近では、日本のロックバンドについて教えてもらったり、日本語の宿題を手伝ってもらうなどした。「L-café」での活動や何気ない日常も、彼女にとっては毎日が、日本についての学びの日々であるようだ。「お互いに教え合ったりして、交流することが楽しい」。L-caféで様々な人との出会いを重ねるベトラさんは、充実した笑顔で語ってくれた。



▲ベオグラードの風景

セルビア共和国

面積…77,474平方キロメートル。(北海道とほぼ同じ大きさ)
人口…712万人(2011年国勢調査による)
首都…ベオグラード



インタビュー
岡大学生取材班
法学部法学科3年
柿林 侑里

Petra Pribićević

文学部特別聴講学生

ペトラ・プリビチェビッチ



研究、スポーツ、趣味、特技…学内外のさまざまな場面で活躍する岡大生たち。そんなきらりと光る学生を、同じ学生の目線から紹介する。